

株主通信

JASDAQ 証券コード：3386

第28期 2010 Business Report
2010.1.1-2010.12.31



Inspiration for Life Science

特集

広がる、役立つ、
ライフサイエンス



人と科学のステキな未来へ
コスモ・バイオ株式会社

世界のライフサイエンス研究を支援する専門商社

第一に選ばれる研究開発支援の会社を目指し、 活力ある成長企業へと進化してまいります。

当社は2010年で、ジャスダック証券取引所への株式上場後、5周年を迎えました。

これまでの成果と課題を踏まえつつ、今後は更に歩みを一歩進め、
お客様から第一に選ばれる研究開発支援の会社となるべく、人材をはじめとした
経営資源の強化を推進し、コーポレートブランドの高揚を図ってまいります。
「活力ある成長企業を目指す」というビジョンは、その意思を明示したものです。

活力ある成長企業を目指す

ビジョン

- 第一に選ばれる研究開発支援の会社
- 世界のライフサイエンス研究に貢献
- 多角的な事業基盤の強化

トップインタビュー

当期(2010年12月期)の連結業績等について

Q1 当期は、当初予想を大幅に上回り4期ぶりの増収増益となりましたが、主な要因は何ですか？

当期の連結業績は前期に比べ、売上高が26.4%増、営業利益が53.6%増の大幅な増収増益となりました。当期と前期の大きな違いは、前期までは持分法適用関連会社であったビーエム機器株式会社を、2010年3月に連結子会社化したことです。この結果、当第2四半期以降の9ヵ月間において同社の業績が当社の連結業績に寄与しております。この点については、当初から業績予想に盛り込んでおりました。

当初予想から変わってきた点は、①為替が予想を上回る円高で推移し原価率が低下したこと、②諸経費抑制への取組みが計画以上の成果となったことです。これを主な要因として、当初はほぼ横ばいを予想していた利益が大幅に増加する見込みとなり、2010年8月と11月の2度にわたって業績予想の修正を公表いたしました。

Q2 2010年の事業環境はいかがでしたか？

バイオ研究関連分野の事業環境は、総じて盛り上がりに欠けた状況であったと言わざるを得ません。企業における研究開発活動は堅調に推移しましたが、大学・公的研究機関では、2009年度補正予算の執行により2010年1月～3月の期間は市場が一時的に活性化されたものの、4月以降は、政府の財政再建等により予算が伸び悩み、研究用試薬等の需要は低調に推移しました。

● 連結業績の推移

(単位:百万円)

	前期実績	当期		前期比増減(%)	当初予想比増減(%)
		当初予想 (2月12日公表)	実績		
売上高	5,282	6,659	6,676	+26.4	+0.3
営業利益	456	456	701	+53.6	+53.7
経常利益	445	446	635	+42.7	+42.5
当期純利益	137	243	373	+172.4	+53.7



代表取締役社長

笠松 敏明

Q3 政府予算の変動は、バイオ研究の分野に大きな影響を及ぼすのですか？

企業も当然のことながら基礎研究は行っています。しかし、基礎研究のすそ野は非常に広く、その全てを民間企業のみで行うことはとてもできません。やはり、国家レベルで基礎研究が行われ、その成果を基にして企業の研究が成り立っている、という構造が基本となっています。当社の事業領域は、この「基礎研究」の分野ですので、業績は政府予算の変動に比較的大きな影響を受けることは確かです。

コスモ・バイオの特長・強みについて

Q1 ライフサイエンス研究を支援するコスモ・バイオの基本的な特長は何でしょうか？

当社の事業は、ライフサイエンスを支えるバイオ研究に必要な試薬などの商品を世界から仕入れて、大学や公的研究機関、企業などの研究部門に販売する商社機能が中心であり、「卸」の分類となっております。しかし、本来は「サービス業」でもよいのではという議論をしたこともあります。それは、当社にとって、お客様への「商品の販売」は「的確な情報提供」があつてこそ実現可能なことだからです。

仕入先である試薬メーカーの多くは小規模なベンチャーが多く、十分な販路がありません。一方、研究者は常に新しい

トップインタビュー

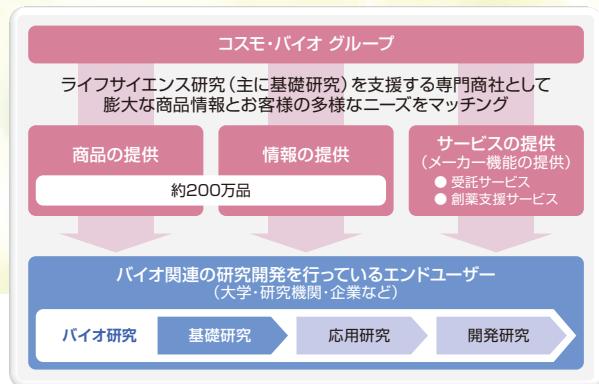
試薬を追い求めています。自ら探し出すのは極めて困難です。当社業務の根幹は、この仕入先シーズ（技術・商品）と研究者のニーズをマッチングさせることであり、そのために蓄積している商品情報は、200万品にわたる膨大なボリュームとなっております。

当社では、バイオ研究関連業界の他社に先駆けて、各専門分野の研究者に対して商品情報を分りやすく提供する独自の商品情報検索システムを開発・導入することにより、研究者を強力にサポートすることに加え、業界の発展に貢献してまいりました。

2 コスモ・バイオにとって、重要な経営資源は何でしょうか？

前述の商品情報検索システムも重要な経営資源の一つですが、まず一番に「人」です。最先端の研究活動をサポートするためには、システムだけでは不十分であり、やはり、多くの専門知識を習得した人材による対応が不可欠となります。世界中で日々生み出されている新しい商品にも常に目を配り、収集した情報を研究者に素早く提供していく活動が非常に大切です。その理由は、研究の舞台では、猛烈なスピードで厳しい研究開発競争が繰り広げられているからであり、当社は、この舞台裏を支える役割を担っています。

● コスモ・バイオ グループのビジネスモデル



カタログ



コスモバイオニュース

こうした環境下、人材育成方法として当社は、大学や大学院でバイオ関連の専門課程を修了した新卒者を中心に採用し、ベースのある人材に実際の業務を通じて必要な知識とノウハウを習得・付加させていく方法をとっております。

3 そうした中では、仕入能力も非常に重要な要素となりますね。

その通りです。業績を大きく左右する要因となるほど大きな要素です。事実、2007年～2009年の減収の背景には、最大の要因として有力仕入先の喪失がありました。2007年以降、ライフサイエンス研究関連業界でも海外ではM&Aが頻繁に行われる環境となり、有力仕入先がM&Aで消失してしまう事態が相次いで発生いたしました。

そうした厳しい逆風の中で、減収幅を最小限に食い止めることができたのは、社員すなわち「人」の力の結集であったと自負しております。社員一人ひとりの努力の結果、従来の有力仕入先に代わる新仕入先を早期に発掘し、仕入体制の再構築を図ることができました。

今後の戦略について

1 連結グループ経営の視点から、国内の2つの子会社はどのような位置づけとなりますか？

2010年3月に連結子会社化したビーエム機器は、当社と同様にライフサイエンス研究支援の商社です。なかでも当社

は研究用試薬を、ビーエム機器は研究用機器・器材・消耗材を得意としております。両社の商材ともに研究活動には必要不可欠なものです。両社が一つのグループとして結束した営業活動を展開することで、営業成果を向上させていくことができるものと期待しております。

もう一つの国内子会社である株式会社プライマリーセルは、社名の通り、主に初代培養細胞（プライマリーセル）という細胞を製造・販売するメーカーです。商社である当社がこうしたメーカーをグループの一員に有する理由は、安定基盤の創出と拡大です。グループとしての本業はあくまでも商社機能に軸足を置きながら、メーカー機能を一部複合させることで、安定的な事業拡大を図っていく方針です。

2² 海外ビジネスの展開についてはいかがですか？

海外子会社であるCOSMO BIO USA, Inc.は、米国市場開拓の拠点であると同時に世界に向けた情報発信拠点であり、その果たすべき役割は、今後、より大きくなっていくものと考えております。

また、人口増加や経済発展の状況に呼応して、中国やインドなどアジア市場が確実に拡大してくるでしょう。このようなアジア、また欧州の市場開拓には、代理店政策をとり、新規チャネルを開拓することによって、海外ビジネス拡大を押し進めてまいります。

2³ 今後、特に注力していきたい分野はどこでしょうか？

特に、「細胞関連」、「RNA」、「創薬支援」の3つの分野に注目しております。

細胞関連分野の中でも、今話題の「iPS細胞」を利用した再生医療の分野は、政府予算も毎年大きく成長分野の一つです。細胞をキーとした様々な商材やサービスを提供してまいります。細胞の取扱いを得意とする子会社プライマリーセルとのシナジー効果も期待でき、今後、この分野でしっかりとした事業基盤を築いていきたいと考えております。

近年急速に研究が進んでいる「RNA分野」では、病気の原因となる遺伝子を抑え込む効果が期待される小さなRNA分子が発見され、今後、RNA研究の更なる加速が予想されます。2010年の株式会社B-Bridgeからの事業譲受により、この事業の活発化を図り、将来の柱の一つに育成していきたいと考えております。

最後に、製薬会社が薬を新たに開発する（＝創薬）のを支援する受託サービスの「創薬支援」については、創薬の初期段階で行う様々な試験の一部がアウトソーシングされるケースが増えておりますので、この市場ニーズの獲得を進めていく考えです。子会社のプライマリーセルにもこの機能があり、この分野でもグループ力を発揮していけるものと確信しております。

ライフサイエンスの分野は非常に大きな市場であり、今後、ますます発展していくでしょう。その中で、当社はその一角で研究支援という一部の領域を担っているに過ぎません。しかし、これがなければ研究そのものが滞る大切な領域です。私たちはこの「研究支援」を使命と考え、この活動を通じてライフサイエンスの発展に貢献していると自負しております。

全社員が、こうした自負と遣り甲斐を持って業務に当たり、その総体として一歩ずつ企業価値の向上に繋げてまいります。株主の皆様には引き続き、当社の経営にご支援を賜りますようお願い申し上げます。



特集： 広がる、役立つ、ライフサイエンス

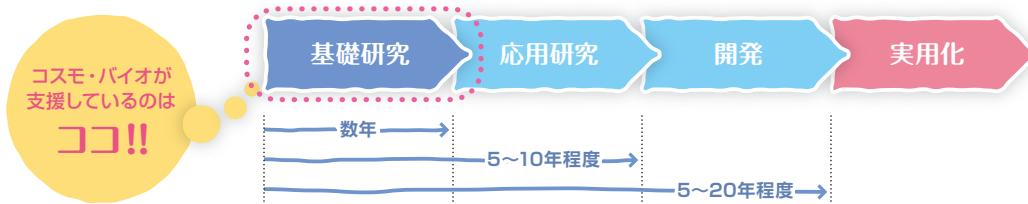


ライフサイエンスは、こんなに身近なところで幅広く私たちの生活を支えてくれているのよ！

ライフサイエンスは日本語で「生命科学」。名前からは医療分野が中心というイメージを持たれている方も少なくないかもしれませんが、でも、ほんとうはもっと幅広く、人々が元気で楽しく幸せに暮らすためにとても大切な技術として、私たちの生活を支え、同時に経済や社会の発展にも大きく役立っています。



でも、私たちの身近な商品になるまでには、こんなに長い道のりなのね。



大学や公的研究機関、企業などで行われているライフサイエンス研究は、大きく「基礎研究」→「応用研究」→「開発」→「実用化」の4つのステージを経て、初めて私たちの身近な商品や技術として登場します。その間、難易度の高い分野では20年もの長い歳月をかけて実用化されるものもあります。

この4つのステージの中で私たちコスモ・バイオの事業が支えているのは、主に最初の「基礎研究」の段階です。今も、たくさんの分野で基礎研究が進められていますので、今後、私たちの生活品質を更に向上してくれる研究成果がどんどん生まれてくるはずですよ。



夢の治療を可能にするための基礎研究も、ものすごい勢いで進んでいるみたいよ。

注目分野

1

iPS細胞による再生医療・薬剤開発

現在の医療では、移植でないと治せない病気を抱えた方がおられますが、自分に合う臓器の提供を受けることができる方の数は限られています。しかし、2007年、臓器や神経などの体内の様々な細胞に分化させることができる能力を持った細胞(=iPS細胞/人工多能性幹細胞)の樹立に成功したという画期的な研究成果が発表されました。

この技術は近い将来、患者自身の皮膚細胞から拒絶反応を起こすことのないiPS細胞を作製し、必要な細胞に分化・増殖させて体に移植する治療法(=再生医療)につながるものとして、大いに期待されています。まだまだ安全性の確認が必要な段階ですが、実用化に向けた多くの研究が全世界的に繰り広げられています。



注目分野

2

RNAi (RNA干渉) による治療・診断

「遺伝子治療」という言葉を聞いたことがある方も多いかもしれません。近年、遺伝子の機能を制御できる物質「小さなRNA」が発見され、この「小さなRNA」が引き起こす「RNA干渉」という現象を応用した治療法や薬剤開発に向けて、研究が活発化してきています。

例えば、癌細胞に「小さなRNA」を取り込ませることによって癌ができることを抑える効果が得られるなど、様々な病気を遺伝子レベルで治療するための基礎研究がかなり進んでいます。患者の体への負担が少ない治療も可能となるため、RNA薬は「次世代バイオ医薬」として大いに期待され、注目されています。



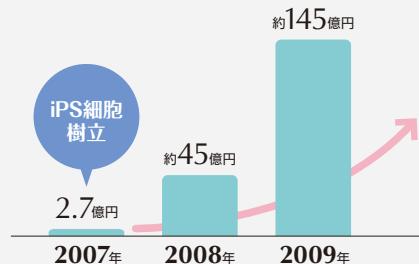
iPS細胞研究に関する政府予算は急速に拡大しており、現在、多くの領域で基礎研究が積極的に行われています。

ライフサイエンス研究を支えている政府の予算はどのようになっているのでしょうか。

例えば、今大きな注目が集まっているiPS細胞に関する政府予算(文部科学省)は、2007年11月の山中教授らの研究グループ(京大)による「iPS細胞樹立」の成功を受け、僅かに2.7億円であった2007年から一転、2008年には約45億円、2009年には約145億円(ともに補正予算を含む)と急拡大しており、今後も大きな伸びが予想されます。

この政府予算の劇的な変化が示すように、ライフサイエンスの世界では、一つの画期的な研究成果が将来の大きなマーケットを生み出す原動力となっています。

iPS細胞研究に関する政府予算の推移(補正予算を含む)



(出展:「iPS細胞研究ロードマップ」文部科学省(2009年6月24日))

トピックス

1
Topics

毎年恒例の 「公開講座応援団」を実施

次の世代を担う「明日の科学者」にライフサイエンスの面白さと楽しさを伝えるお手伝いとして、2004年より大学等の公開講座に協賛する『公開講座応援団』を実施しております。2010年度は、北は北海道から南は九州まで10団体の公開講座に協賛しました。



「食品中のアレルゲン
を評価する-PCR法-」
帯広畜産大学



「ホテルの光で「がん細胞」を追いかける」愛知県がんセンター研究所

2
Topics

「個人投資家向け 会社説明会」を開催

個人投資家の皆様に対するIR活動の一環から、2010年12月11日に、大和インベスター・リレーションズ(株)主催の会社説明会に参加しました。当社ウェブサイトにて、説明会の資料およびQ&Aを掲載しております。



<http://www.cosmobio.co.jp/ir/new/2010/12/20101213.asp>

3
Topics

学術集会附設展示会への 出展とセミナーの開催

研究者への情報発信を通じた当社プレゼンスの向上を目的に、2010年は、日本再生医療学会や日本癌学会をはじめ、11の学会展示会に出展するとともに、そのうち3つの学会で研究者向けセミナーを開催しました。



国際免疫学会での展示風景

中間配当の実施に関するお知らせ

当社は従来、年間配当の実施を期末において一括して行ってきましたが、「株主の皆様への利益分配の機会の充実」を図るため、2011年12月期より中間配当を実施することとしました。

2011年12月期の配当は、右記とさせていただきます見通しです。

● 2011年12月期 配当予想

1株当たり配当金

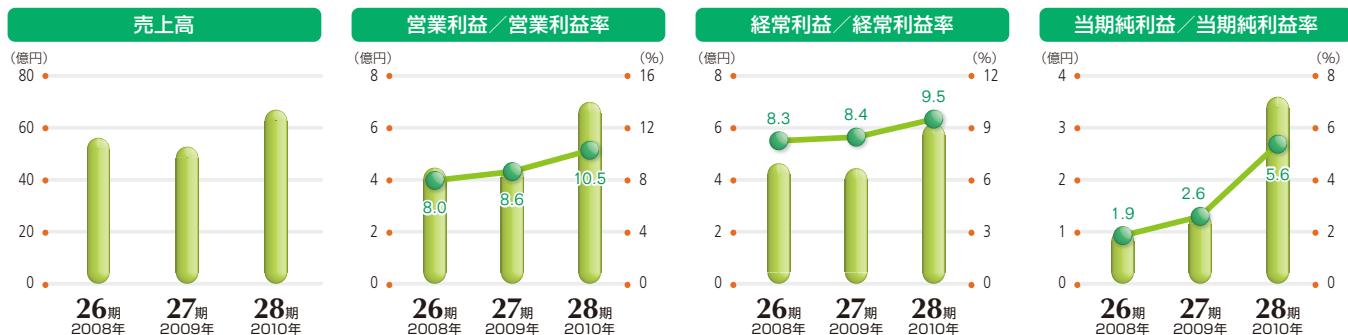
中間配当	期末配当	年間配当 (合計)
800円	1,000円	1,800円

● 表紙について



地球が育てている無数の生命体。その一つひとつに無限の可能性が秘められています。私たちコスモ・バイオは、この可能性を最大化させることで、人と科学のステキな未来へつなげていきます。

営業の概況（連結）



● 連結範囲の変更に伴う売上高への影響

ビーエム機器(株)を持分法適用関連会社から連結子会社化したことで、同社の業績(2010年4月~12月)が連結業績に寄与しています。

● 為替変動に伴う利益への影響

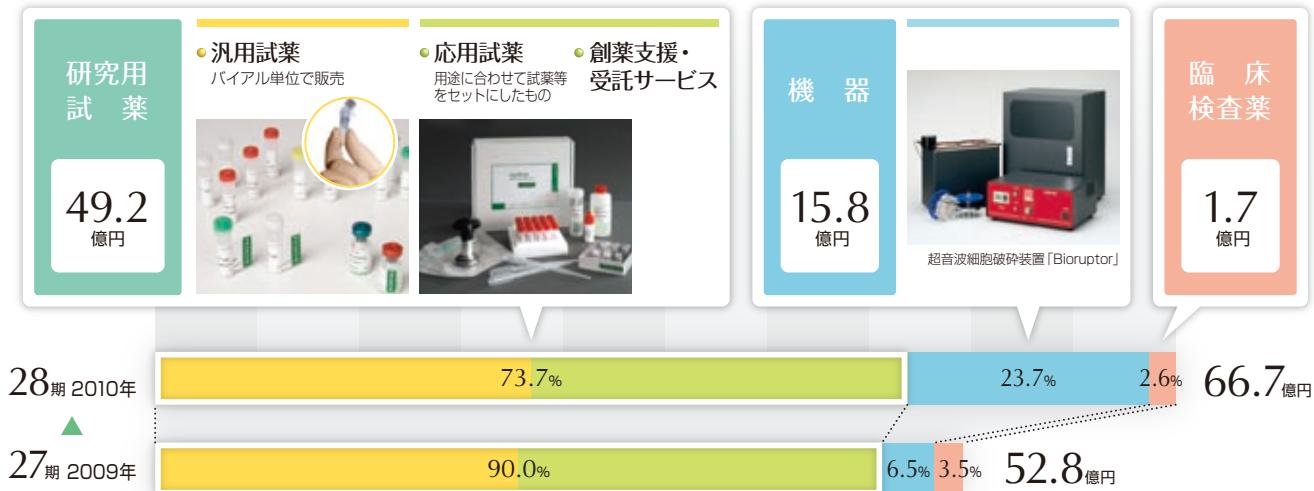
当社は多くの商品を海外から輸入していますが、為替が1ドル当たり平均で前期94円から当期87円となり、利益率改善の一因となりました。

● 経費抑制効果

諸経費抑制の取組みが計画を上回る効果を発揮したことも、利益率改善の一因となりました。

商品分類別連結売上高

ビーエム機器(株)の連結子会社化により、当期の連結売上高に占める「機器」販売比率が拡大し、構成比には下のような変化が生じています。



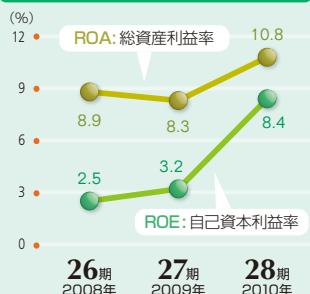
連結財務諸表（要約）および主な連結経営指標

● 貸借対照表

(単位:百万円)

	前期 2009年12月31日現在	当期 2010年12月31日現在		前期 2009年12月31日現在	当期 2010年12月31日現在
資産の部			負債の部		
流動資産	3,908	4,720	流動負債	956	831
現金及び預金	1,210	980	支払手形及び買掛金	438	397
受取手形及び売掛金	1,626	2,235	短期借入金	20	20
有価証券	530	606	その他	497	414
たな卸資産	451	701	固定負債	281	281
その他	90	203	役員退職慰労引当金	115	15
貸倒引当金	△ 0	△ 7	その他	166	266
固定資産	1,649	1,449	負債合計	1,237	1,113
有形固定資産	50	163	純資産の部		
無形固定資産	172	191	資本金	918	918
投資その他の資産	1,425	1,093	資本剰余金	1,221	1,221
投資有価証券	811	746	利益剰余金	2,223	2,524
関係会社株式	337	11	評価・換算差額等	△ 44	△ 43
その他	276	338	少数株主持分	—	435
貸倒引当金	—	△ 2	純資産合計	4,319	5,057
資産合計	5,557	6,170	負債純資産合計	5,557	6,170

ROA / ROE



自己資本 / 自己資本比率



たな卸資産回転率



従業員1人当たり売上高



One Point! 解説①
「収益力」

ROEやROAは、自己資本や総資産を活用してどれだけ利益を上げているかを見るための指標です。両指標ともに向上トレンドを示していますが、特に、当期のROEが大幅に改善しておりますが、これは、当期純利益が前期比172.4%増の大幅増益となったことによります。

One Point! 解説②
「効率性」

当社の取扱商品は約200万品に及び膨大なボリューム。これらは全ていわば“生もの”です。これまで積み重ねてきた経験とノウハウにより、在庫として確保すべき商品の的確な選定による販売活動を遂行することで、当社のたな卸資産回転率は年間10回転前後の高い効率性を確保しています。

● 損益計算書

(単位:百万円)

	前期 2009年1月1日~ 2009年12月31日	当期 2010年1月1日~ 2010年12月31日
売上高	5,282	6,676
売上原価	3,118	3,827
売上総利益	2,164	2,849
販売費及び一般管理費	1,707	2,147
営業利益	456	701
営業外収益	73	46
営業外費用	84	111
経常利益	445	635
特別利益	6	34
特別損失	7	17
税金等調整前当期純利益	444	652
法人税、住民税及び事業税	176	143
過年度法人税等	157	—
法人税等調整額	△ 26	107
少数株主利益	—	27
当期純利益	137	373

● キャッシュ・フロー計算書

(単位:百万円)

	前期 2009年1月1日~ 2009年12月31日	当期 2010年1月1日~ 2010年12月31日
営業活動によるキャッシュ・フロー	657	202
投資活動によるキャッシュ・フロー	△ 383	△ 334
財務活動によるキャッシュ・フロー	△ 66	△ 93
現金及び現金同等物に係る 換算差額	△ 2	△ 4
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	205	△ 229
現金及び現金同等物の期首残高	1,206	1,411
現金及び現金同等物の期末残高	1,411	1,181

(注) 株価は各12月期の末日終値



One Point! 解説 ③

株主還元

当社では、株主の皆様への利益還元を経営の重要事項の一つと認識しております。当社の株式を長期的かつ安定的に保有していただくため、安定配当を行っていくことを念頭に置き、配当性向を重視しつつ、今後の収益状況の見通しなどを総合的に勘案して決定すべきものと考

えております。

当期は、1株当たり1,200円の普通配当に、上場5周年記念配当600円を加えて、1,800円(前期に比べ600円の増配)とさせていただきます。

会社概要

(2010年12月31日現在)

商号 コスモ・バイオ株式会社
 設立 1983年8月25日
 所在地 〒135-0016
 東京都江東区東陽二丁目2番20号 東陽駅前ビル
 資本金 918百万円
 事業内容 ライフサイエンスに関する研究用試薬、機器、
 臨床検査薬の輸出入及び国内販売
 従業員数 連結：112名 個別：76名

役員

(2011年3月25日現在)

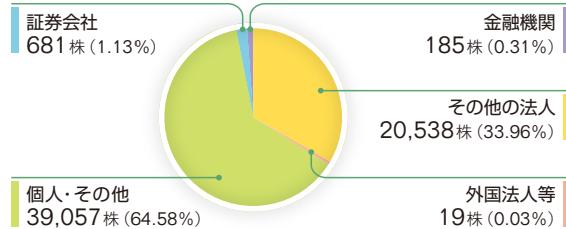
代表取締役社長 笠松 敏明
 専務取締役 田中 知知
 常務取締役 鈴木 忠
 取締役 櫻井 治久
 取締役 船戸 俊明
 常勤監査役 村田 実
 監査役 佐々木 治雄
 監査役 堀米 泰彦

株式の状況

(2010年12月31日現在)

発行可能株式総数.....183,616株
 発行済株式の総数.....60,480株
 株主数.....2,478名

所有者別株式分布状況



大株主の状況

株主名	持株数(株)	議決権比率(%)
東京中小企業投資育成株式会社	11,520	19.05
コスモプロパティサービス株式会社	5,760	9.52
コスモ・バイオ従業員持株会	4,742	7.84
福井 朗	3,000	4.96
株式会社ブルボン	2,783	4.60
原田 正憲	2,200	3.64
柴沼 篤夫	1,480	2.45
鈴木 忠	1,480	2.45
田中 知	1,480	2.45
高木 勇次	1,480	2.45

(注) コスモプロパティサービス株式会社はコスモ石油株式会社の連結子会社です。

株主メモ

事業年度 1月1日から12月31日まで 株主名簿管理人 三菱UFJ信託銀行株式会社
 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号
 定時株主総会 毎年3月開催 公告方法 電子公告 <http://www.cosmobio.co.jp/>
 基準日 12月31日 (ただし、電子公告によることができない事故その他やむを得ない事由が生じた場合は、東京都において発行する日本経済新聞に掲載して行います。)
 剰余金の配当の基準日 6月30日、12月31日 上場証券取引所 大阪証券取引所 JASDAQ スタンダード
 単元株式数 1株 証券コード 3386

株式に関するお問い合わせ先 ▶ 住所変更等、株式に関する手続き・お問い合わせは、お取引の証券会社へお願いいたします。



人と科学のステキな未来へ

コスモ・バイオ株式会社

〒135-0016

東京都江東区東陽二丁目2番20号 東陽駅前ビル
 Tel. 03-5632-9600 Fax. 03-5632-9613